

# 小学校英語教育における内容言語統合型学習 (CLIL) の可能性： ドイツにおけるCLILをはじめとする英語教育事情にも注目して

北 條 礼 子\*

(平成28年2月29日受付；平成28年6月9日受理)

## 要 旨

平成23年度より全国公立小学校高学年において外国語活動(英語)が必修化されたが、現在5年生時点で既に同活動に意欲が低く、不安が高い児童が38%存在していることも報告されている。ここから、児童の同活動への動機づけを高める何らかの手段が必要な状況にある。このような動機づけを刺激する手立ての一つとしてヨーロッパ発祥の内容言語統合型学習(CLIL)があげられる。本稿は、まず、先行研究の概観を含めてCLILについて述べ、次に筆者が2015年9月にドイツの首都ベルリンの文部科学省やギムナジウム、ベルリン市を取り巻く位置にあるブランデンブルク州の教員研修所、私立小学校を訪問し、小学校を含む英語教育について聞き取り調査を行った結果について述べる。最後に多くベルリンで用いられている小学生用の最後の段階の英語の教科書について言及する。

## KEY WORDS

CLIL (Content and Language Integrated Learning) 内容言語統一型学習  
motivation 動機づけ English education at elementary school 小学校英語教育  
Germany (Berliin, Brandenburg) ドイツ (ベルリン, ブランデンブルク州)

## 1 研究の背景：

### 1.1 小学校外国語活動(英語)の現状

2011(平成23)年度より、全国公立小学校の高学年5・6年生において外国語活動(英語)が必修化され、週1回年間35回実施されている。外国語活動の基本理念(文部科学省, 2004)として英語嫌いを生み出さないことがあげられていたが、同活動が必修化された高学年の5・6年時点で、同活動に対して「低意欲・高不安」な気持ちを抱いている児童が両学年においてそれぞれ38%存在していたことを報告されている(横石・北條, 2013)。

### 1.2 高学年児童の外国語活動(英語)への動機づけを高める手立て

児童の外国語活動に対する動機づけを低下させないため、児童の知的欲求に合致するいくつかの手立てが考えられる。具体的には、文字学習、国際交流、他教科関連内容を取り入れた活動、ソーシャル・スキルを組み込んだ活動、自律的学習態度の養成に効果があるポートフォリオの活用があげられる(北條・松崎ほか, 2013)。

2012(平成24)年の日本英語検定協会・英語教育研究センターによる調査の結果、外国語活動で教員が抱えている一番の課題は「指導内容・方法」であった。「指導内容」について、文部科学省による新学習指導要領では「指導内容や活動については、児童の興味・関心にあったものとし、国語科、音楽科、図画工作科などの他教科で児童が学習したことを活用するなどの工夫により、指導の効果を高めるようにすること」とされている。外国語活動の指導内容を高学年児童の興味に合ったものとするため他教科との連携が指摘されている。

Benesse(2010)による学級担任を対象とした調査結果から、外国語活動において心がけている指導に関する質問に対し、他教科の内容を取り入れていると回答した学級担任は「とても心がけている」、「まあ心がけている」を併せて16%であり、他教科と関連させた外国語活動については実施の度合いが低い状況にある。

アレン玉井(2010)は、第二言語は対象言語を用いて内容のあるもの(多くの場合は教科を)を学ぶ時に最も効率的良く学習されると述べている。また、二五(2014)はCLILに基づく授業は、思考や協学の活動を取り入れながら効果的な内容と言語の両方の学習を図ることができ、学習者の授業に対する動機づけ、理解度、満足度なども向上させることが可能であるとしている。さらに、内藤(2015)は、CLIL(内容言語統合型学習: Content and Language Integrated Learning)に基づく活動には、学習者の興味・関心を引き出し、児童は内容を理解し、その内容を身につけながら英語も習得していくという方向性があり、実りある英語の学習へと繋がっていき、文化、習慣、行動、考え

方など様々な事柄を学習し、理解しながら動機づけを高め、英語能力も向上させていく方法と考えられることから、CLILには大きな効果が期待されると述べている。

以上から、外国語活動で取り扱う題材として他教科で学んだ既習の内容を活用していくことは有効であると考えられる。

## 2 内容言語統合型学習 (CLIL)

### 2.1 CLILとは

ここで、内容言語統合型学習の略称であるCLILであるが、Content and Language Integrated Learningの頭文字をとったものであり、1990年代にヨーロッパで開始され、発展してきた外国語指導法である。CLILは、言語学習と教科内容を統合させ、そこに思考活動と協学、異文化理解を取り入れ、学習者の体験的学習の促進を1つの目標としている(山野, 2013)。池田(2011)によれば、CLILは、教科を語学教育の方法により学ぶことで効率的かつ深いレベルで修得し、また英語を学習手段として使うことで実践力を伸ばす教育法であり、学習スキルの向上も意図されており、様々な教育原理・技法を有機的に統合することにより高品質な授業の実現を目指ものであると述べられている。

池田によれば、CLILは理論上、以下のように位置づけられる。

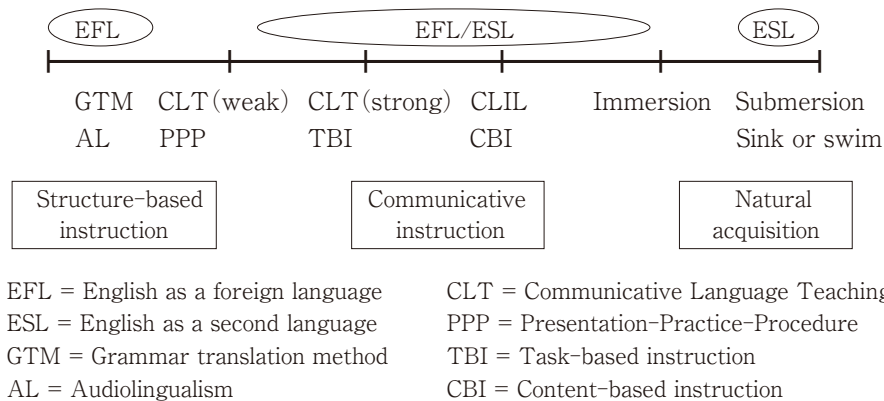


図1 CLILの理論上の位置づけ (池田, 2011)

CLILの授業形態には柔軟性があり、教育現場の実情に合わせて様々なバリエーションが許される。そのこともCLILの特徴の1つとされている(Bentley, 2010; Coyle, 2007; Coyle et al., 2008; 笹島, 2011)。池田(2011)はこのバリエーションを①目的、②頻度・回数、③比率、④使用言語の4つに分類し、以下の図2のようにまとめている。

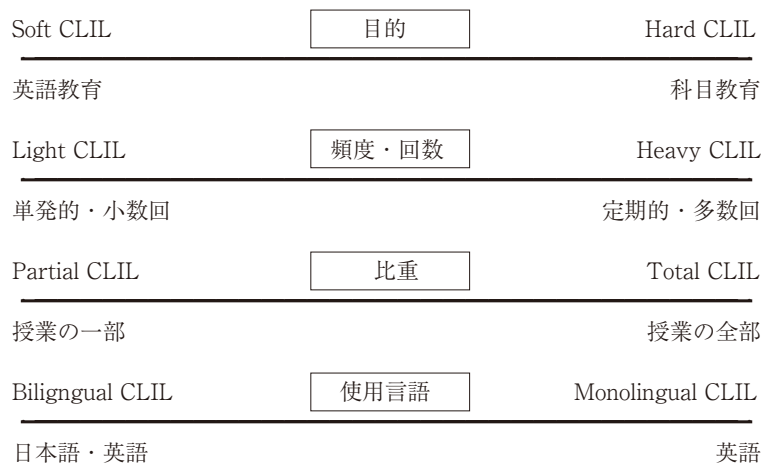


図2 CLILのバリエーション (池田, 2011)

まず、①の目的とは授業の目的であり、内容を取り扱いながらも言語学習に重点を置く場合はSoft CLILとなり、教科内容に重点を置く場合はHard CLILとなる。②の頻度・回数とは、決められた期間に行うCLIL授業の回数を示

している。CLILを学年や学期において単発的に行う場合はLight CLILとなり、本格的にカリキュラムとして取り入れ継続的に行う場合はHeavy CLILとなる。③の比率とは、1回の授業においてCLIL的なタスクをどのくらい取り入れるかを示している。授業の一部にCLILを取り入れる場合はPartial CLILとなり、授業すべてに取り入れて行う場合はTotal CLILとなる。④の使用言語であるが、必要に応じて第一言語を用いる場合はBilingual CLIL、すべて第二言語で行われる場合はMonolingual CLILとなる。

## 2.2 内容言語統合型学習（CLIL）の4つのC

CLILの基本的概念は、教科内容と学習する目標言語を統合する指導法にあり、①内容（Content）、②言語（Communication）、③思考活動（Cognition）、④協学（Community/Culture）の4つのCを中核として理論づけられている。

## 2.3 CLILの10大原理

池田（2011）によれば、CLILには以下の10大原理がある。

1. 内容学習と語学学習の比重は1：1である。
2. オーセンティック素材（新聞、雑誌、ウェブサイトなど）の使用を奨励する。
3. 文字だけでなく、音声、数字、資格（図版や映像）による情報を与える。
4. 様々なレベルの思考力（暗記、理解、応用、分析、評価、創造）を活用する。
5. タスクを多く与える。
6. 協同学習（ペアワークやグループ活動）を重視する。
7. 内容と言語の両面での足場（学習の手助け）を用意する。
8. 異文化理解や国際問題の要素を入れる。
9. 4技能をバランスよく統合して使う。
10. 学習スキルの指導を行う。

小学校段階の外国語活動を見る限り、この10大原理をすべて生かすことは難しいが、3～8は取り入れていくことが可能であると思われる。

## 2.4 CLILの授業実践例

現在、小学校外国語活動では、積極的な文字指導は実施されていないことから、池田（2011）が示す10の大原理はすべて扱うことは難しい。

他教科の内容を取り入れたCLIL型の授業実践例をまとめたが、以下の表1のとおりである。

表1 他教科の内容を取り入れたCLIL型の実践授業の対象者、内容、考察・課題

研究者	対象者	内容	考察・課題
塚越（2007）	新潟県 6年生17名	算数（11から20までの数の英語表現に親しむ、How many ～? という英語表現に親しむ）、社会科（地図記号は国の特徴を表すことを知る）、理科（動物の卵の数を比べる活動を通して、一億までの大きな数の英語表現に親しむ）という既習内容を用いた外国語活動プログラムを開発した。	ARCS動機づけモデルに基づく5つの全側面で高い評価を受け、他教科関連の内容を組み入れた学習プログラムは、6年生児童の英語への動機づけを向上させる効果があることがわかった。
北澤（2009）	新潟県 4年生30名	社会科（国旗と国名、その国の食べ物を用いて、Where is ～ from?, It's from ～. という英語表現に親しむ）、算数（実験校の交流校があるオーストラリア、アデレード市と日本の時差を用いて、What time is it?, It's ～ (o'clock). のやりとりができる、国語（game, pizza, kg, cm, JRなどの身近な英語表現を探したり、start-goal, open-closeなどの普段から目にする英単語（反意語とのペア）を線で結ぶ）という内容を取り入れた外国語活動プログラムを開発した。	ARCS動機づけモデルに基づく5つの全側面で高い評価を受け、他教科関連の内容を組み入れた学習プログラムは、4年生児童の英語への動機づけを向上させる効果があった。中でも、「もっとしてみたい」という意欲の側面での評価は5点満点中4.97であり、特に高かった。

山岸 (2010)	新潟県 6年生32名	国語(漢字の偏やつくりなどの部首と英単語, 画像を組み合わせたり, 漢字を作ることで, 漢字の部首に当たる英語表現に親しむ), 食育(身近にある食べ物を用い, 2つの食材を組み合わせで別の味を再現する活動を通して, How does it taste? It's sweet/ salty/ bitter/ sour/ hot. と答える表現に親しむ), 算数(錯視図を用いて, ものの長さ, 大きさ, 形を比べることにより, Which is longer, A or B? Which is bigger, A or B? など, 長さや大きさを表す英語表現に親しむ) という内容を取り入れ, スマートボードを活用した外国語活動プログラムを開発した。	ARCS動機づけモデルに基づく5つの全側面で高い評価を受けたことからスマートボードを活用したCLIL型の学習プログラムは, 6年生児童の英語への動機づけを向上させる効果があった。しかし, 「自信」の側面の評価が若干低かった。特に6年生にとって, 国語の内容のうち, 単純な組み合わせ問題は, やや物足りない内容であった。
山野 (2011)	山口県 長野県 埼玉県 東京都 大阪府 5・6年生 208名	各小学校において社会科, 道徳, 家庭科, 国語, 算数, 理科と統合したCLIL授業を実践した。大阪府では“Hi, friend! 2”を用いて通常の外国語活動をnon-CLIL授業として行い, CLIL授業と比較した。	CLILの4原理を促進できる可能性があった。しかし, 課題としてCLIL型授業における英語の多様性と難しさ, 4原理を取り入れた指導案作成における教員の負担が大きいたことが明らかとなった。
茂木 (2013)	新潟県 5年生46名 6年生52名	CLIL的外国語活動の実践として, 食育とタイアップした「私のオリジナル弁当」を紹介する活動を行ったWhat would you like? Looks delicious. Looks good. Looks healthy. など自然な英語表現を扱った。	CLIL型の学習プログラムは, 4年生児童の英語への動機づけを向上させる効果があった。特に「自信」に関する項目が有意に高かった。食育以外の他教科とのコラボレーションによるCLIL的外国語活動の開発により, 子どもの外国語活動に対する自信を高める効果があるのかどうかをさらに検討する必要があることが課題となった。
永島 (2014)	新潟県 6年生113名	社会科(世界の色, 国旗, 世界の料理)と内容面で連続性があり, そこに絵本の読み聞かせ, チャンツを組み合わせた外国語活動プログラム3回分を開発した。	CLIL型の学習プログラムは, 6年生児童の英語への動機づけを向上させる効果があった。ARCS動機づけモデルの5つの側面のうち, 「自信」の評価が若干低かったが, 注意, 適切性, 自信, 満足感, 意欲という5つの側面で高い評価を受けた。
二五 (2013)	広島県 6年生	ひろしま型の指導案の枠内で多重知能や教科横断的指導(算数)の視点を独自に盛り込み, 「英語の数」をテーマとする英語科の授業を3回続きで実践した。	算数の計算を取り入れ, 英語学習だけを意識することなく, インプット量やコミュニケーションの機会を増やし, 自然に数の語彙の定着を図ることができた。教科横断的には, 国語・音楽・体育・図画工作など多様な活動を取り入れることにより, たとえ算数が苦手であったとしても, 45分の英語の授業時間内にどの子どもにも少なくとも一つは活躍の場を提供することができた。
金安 (2015)	新潟県 4年生64名	社会科(日本と世界の地図記号を用いて, What's this mark? という表現に親しむ), 算数(1から59までの英語表現に慣れ親しみWhat time is it? It's ~(o'clock). と言える), 国語(十二支の英語の生き物表現を知り, 十二支時計を用いて方位と時刻の言い方に慣れ親しむ) という内容を取り入れた外国語活動プログラムを開発した。	CLIL型の学習プログラムは, 4年生児童の英語への動機づけを向上させる効果があった。ARCS動機づけモデルに基づく4つの側面で高い評価を受けたが, 「自信」の側面の評価が若干低く, 4年生の自信をどのように向上させるのが課題として残った。



楠 (2016)	新潟県 4年生79名	上記の金安(2015)を参考に、国語(十二支の英語の生き物表現を知り、十二支時計を用いて方位と時刻の言い方に慣れ親しむ)、社会科(日本と世界の地図記号を用いて、What's this mark? という表現に親しむ)を実施し、さらに理科(普段食べている植物はどの部分なのかを考え、英語での植物や植物の部分の名前を知り、What part do we eat? という英語表現に慣れ親しむ)という内容を取り入れた外国語活動プログラムを開発した。	CLIL型の学習プログラムは、ARCS動機づけモデルに基づく5つの全側面での高い評価を受け、4年生児童の英語への動機づけを向上させる効果があった。しかし、ARCS動機づけモデルの5つの側面のうち、「自信」の評価が5点満点で4.00以上ではあったが、若干低かった。内容を児童の関心に合わせると、英語表現が難しくなるという課題が残った。
----------	---------------	---	--

### 3 ドイツ(ベルリン、ブランデンブルク州)の英語教育事情

#### 3.1 ドイツの教育制度

ト部(2015)によると、ドイツとドイツの教育制度は以下のとおりである。

まず、ドイツの正式な国名はドイツ連邦共和国であり、1990年に旧東ドイツ(ドイツ民主共和国)が西ドイツ(ドイツ連邦共和国)に編入されることで統一ドイツが成立した。人口は2012年度現在で約8,200万人であり、ヨーロッパの中央部に位置している。領土面積は約35万7,022km<sup>2</sup>であり、領土面積は日本よりやや小さい。領土は、南端部のアルプスにかかる地域を除き、なだらかな丘陵地と広大な平原、森林からなる。北海道より高緯度に位置し、政体は16州からなる連邦共和制であり、首都はベルリンである。

学年度は8月1日に始まり7月31日に終わる。夏休みは約6~7週間であり、州により時期が異なっている。実際の学年の開始も州により、また年により、8月または9月である。2学期制であり、前期は8月から1月まで、後期は2月初めから7月末までである。義務教育は、原則として満6歳からであり、義務教育の入学年齢の基準日は、6月30日から9月30日の間に設定されている。しかし、親からの申請がある場合、基準日に満6歳にならない子供にも早期就学が認められている。

ドイツの学校制度は、三分岐型の複線型学校制度になっているのが特徴である。三分岐型とは主に3種類の中等学校の中から一つを選択して進学することである。子どもたちは、基礎学校を卒業すると、基幹学校(Hauptshule: 5年制)、実科学校(Realshule: 6年制)、ギムナジウム(Gymnasium: 8年制)のいずれかに進学する。基幹学校を卒業すれば、就職資格(Berufsreife)が得られ、見習いとして職業訓練を受け普通に就職できるようになる。実科学校を卒業すれば、前期中等教育修了資格(Mittlere Reife)が与えられ、職人などを目指して専門学校に進学するか、職業訓練を受けて、主に専門職に就職することが可能になる。ギムナジウムを卒業すれば、大学入学資格(アビトゥア:Abitur/Hochschulreife)が得られ、大学に進学することができるようになる。アビトゥアはギムナジウム卒業試験の合格者に与えられる修了資格であり、大学入学資格となる。アビトゥア試験は、1788年にプロイセンで開始された約230年の歴史と伝統のある試験であり、受験者は教養の高さ、分析力、論理構成力などが試される。その合否は、アビトゥア試験(論述式および口述式)とギムナジウム最終の2年間の学業成績を総合して判定される。

ドイツの教育行政は、文化連邦主義の理念に基づき、地方分権が徹底されている。ドイツは16州から成る連邦国家であり、教育政策は州に権限があり、各16州それぞれに文部省があり、制度やカリキュラムも州によって異なっている。

#### 3.2 ドイツ(ベルリン、ブランデンブルク州)の小学校、ギムナジウムの英語教育事情

筆者は、2015年9月にドイツ首都であるベルリンとベルリンを取り巻く位置にあるブランデンブルク州を訪れ、同僚の助けを得て、小学校を含む英語教育事情について聞き取り調査を行った。訪問先のうち、英語教育事情の聞き取りができたのは、①ベルリン文部省、②ハインリッヒ・シュリーマン・ギムナジウム、③コトブス運動学校(ここでは英語の授業を参観した)、④ブランデンブルク州学校監督庁(学校・教師教育局)の4か所であった。①、②はベルリンにあり、③、④はブランデンブルク州にある。

まず、ベルリン文部省でわかったことは、ドイツでは英語が第一外国語とは限らず、特に英語を重点化するという動向はないことであった。第1学年から、第10学年まで外国語(英語、フランス語、その他)を義務付ける政策がとられているが、ベルリンでは英語は第3学年から教えられている。CLILについては、教員研修で導入されており、重要な教育政策の一つになっているとのことであった。

次に、ハインリッヒ・シュリーマン・ギムナジウムでは、英語、フランス語、ロシア語、ラテン語、古代ギリシャ語、スペイン語の6か国語が教えられている。英語は第一外国語である。ドイツでは教員、保護者、生徒代表から成る学校会議が存在し、そこで教育課程・時間割が決定される。語学として古典語クラスと新言語クラスがあり、後者

では週1時間の英語が多い。基礎学校で何を重点的に習ってきたかにより、生徒ごとに関心が異なるため、どの言語が人気が高いのかは一口には言えない。同校校長は、CLILという言葉は知らないが、英語と他教科の結合、バイリンガル授業、バイリンガル・モジュールは普通に行っており、例えば、バスケットボールを英語で学ぶことによりアメリカ文化に触れたり、演劇を英語で行うほか、歴史や政治の授業なども英語によるバイリンガル授業として行われることが多い。9年生の生徒代表Lucas Zemkeによると、アメリカ、イギリス、オーストラリアなど特定の地域で人々がそこでどのように生活をしているかなどを英語で学ぶとすることが多く、このようなバイリンガル授業は難しく感じることもあるが、内容があるので家で復習したときによく理解することができると感想を述べていた。

さらに、コトブス運動学校であるが、この学校は私立学校であり、各学級の最大定員は22名である。1単位授業時間は90分であり、普通校の45分とは異なっている。英語や音楽は約10名の少人数とし、教員1名ずつで45分ずつを担当し、前半・後半で科目を入れ替えるという体制である。同校では、英語は第1学年から実施（週45分1コマ）し、第3～6学年では、週180分の実施となっている。筆者は5年生の英語の授業を参観したが、内容的には日本とあまり違いがなく、英語の歌を歌ったり、歌に合わせて踊ったりもしていた。英語教員は、同校は移民がいないことから、ドイツの現状とはことなるリアリティにかけける教室空間であると意見を述べていた。授業を参観した英語担当教員はCLILという言葉は聞いたことがないと述べていた。

最後に、ブランデンブルク州学校監督庁（学校・教師教育局）での聞き取り結果は、以下のとおりである。ブランデンブルク州では、英語が大半の学校において第一外国語とされているが、たまにフランス語としている学校もある。英語は第1学年から開始されるが、オーラルのみで始まり、第3学年から徐々に文字学習が導入される。第二外国語としてはスペイン語が多い。ギムナジウムでは第3外国語もある。バイリンガル授業を実施している学校は3%ほどであり、多くはない。外国語教育の改革は必要であるとは考えているが、時間も教員も少なく、特に第二外国語は特にそうである。

#### 4 ドイツのベルリンで用いられている教科書

ここでは、ドイツの小学校最終学年で用いられていることが多い、教科書の内容を紹介する。教科書は、Cornelsen社発行の、“English G 21”である。

まず、目次は以下のとおりである。小学生用の教科書であるが、日本の中学校の内容が扱われていることがわかる。

##### Welcome back

##### Unit 1: Back to school

GF\* 1 RREVISION The simple past: positive statements

GF 2 The simple past: negative statements

GF 3 The simple past: questions and short answers

##### EXTRA topic 1: A trip to Jamaica

##### Unit 2: What money can buy

GF 4 The comparison of adjectives

##### EXTRA topic 2: Special days around the world

##### Unit 3: Animals in the city

GF 5 The *will*-future

GF 6 Conditional sentences (type 1)

GF 7 Adverbs of manner

##### EXTRA topic 3: Animal songs and poems

##### Unit 4: A weekend in Wales

GF 8: Word order

GF 9 The present perfect: use

GF 10 The present perfect: form

GF 11 The present perfect with adverbs if indefinite time

##### EXTRA topic 4: The red dragon and the white dragon

##### Unit 5: Teamwork

GF 12 The *going to*-future

GF 13 Extra Question tags with *be*

EXTRA topic 5: Robinson Crusoe

Unit 6: A trip to Bath

GF 14 REVISION The present progressive

GF 15 The past progressive

EXTRA topic 6: Dan and Jo's summer holidays in New Zealand

\*GF: Grammar File

この教科書の最後には, “What *you* can say in the classroom” としてClassroom Englishも掲載されている。たとえば, “Work with a partner” として, Can I work with Julian? Can I have your ruler/ felt tip/..., please? I agree with Lisa./ I don't agree (with Lisa). It's your turn. などである。

謝辞 ドイツの調査に同行させていただき通訳までしてくださった辻野けんま先生に心より御礼申し上げます。

### 引用・参考文献

- Coyle, D. (2007). Content and language integrated learning: Towards a connected research agenda for CLIL pedagogies. *The International Journal of Bilingual Education and Bilingualism*, 10, 543-562.
- 池田真. (2011a). 『CLIL(Content and Language Integrated Learning)の方法論』. 2016年1月17日検索.  
<https://www.britishcouncil.jp/sites/default/files/eng-clil-overall-presentation-01-jp.pdf>
- 池田真. (2011b). 「CLILと英文法指導: 内容学習と言語学習の統合」. 『英語教育』. 10月号, 34-36.
- 金安由理. (2015). 「小学校外国語活動における他教科内容に関連した学習プログラムの開発研究」. 上越教育大学大学院修士論文.
- 北澤美佳. (2009). 「小学校外国語(英語)活動における他教科内容を関連づけた学習プログラムの開発研究」. 上越教育大学大学院言語系コース(英語)修士論文.
- 楠愛莉香. (2016). 「小学校外国語活動における内容言語統合型学習(CLIL)プログラムの開発」. 上越教育大学言語系コース(英語)提出卒業論文.
- 文部科学省. (2013). 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」. 2016年1月16日検索.  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/.../1343704\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/.../1343704_01.pdf)
- 文部科学省. (2014). 「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革五つの提言～」. 2016年1月16日検索.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm)
- 文部科学省. 『諸外国の教育動向 2014年度版』. 東京: 明石書店.
- 茂木淳子. (2013). 「CLIL(内容言語統合型学習)的外国語活動の実践とその効果」. 『教育実践研究』. 23, 13-18.
- 永島悠一. (2014). 小学校外国語活動におけるCRIに基づく他教科内容に関連した学習プログラムの開発」. 上越教育大学大学院言語系コース(英語)修士論文.
- 内藤徹. (2015). 「CLILを利用した英語教育」. 『仁愛女子短期大学研究紀要』. 47, 7-15.
- 二五義博. (2013). 「算数の計算を活用した教科横断型の英語指導: 小学校高学年児童を対象とした英語の数の学習を事例として」. 『小学校英語教育学会紀要』. 13, 84-99.
- 笹島茂. (2011). 『CLIL 新しい発想の授業』. 東京: 三修社.
- 塚越勇樹. (2007). 「他教科に内容を関連づけた小学校英語活動の試み」. 上越教育大学大学院言語系コース(英語)修士論文.
- 卜部匡司. (2015). 「CHAPTER 1『半日制』の伝統をもつ学校ードイツ」. (二宮皓編著. 『世界の学校』). 14-24. 東京: 学事出版.
- 渡部良典・池田真・和泉伸一. (2011). 『CLIL内容言語統合型学習 上智大学外国語教育の新たな挑戦』. 東京: 上智大学出版.
- 山岸将史. (2010). 「小学校外国語活動における『英語ノート』に基づいたCRIプログラムの開発研究」. 上越教育大学大学院言語系コース(英語)修士論文.
- 山野有紀. (2013). 「小学校外国語活動における内容言語統合型学習(CLIL)の実践と可能性」. 『英検』研究助成報告』. 25, 94-126.
- 横石和子・北條礼子. (2013). 「児童の不安と学習意欲の関連性の類型に関する調査」. 『JASTEC研究紀要』. 32, 37-58.

# Feasibility of CLIL (Content and Language Integrated Learning) in English Education at Elementary School in Japan: With a Report on English Education in Berlin and Brandenburg in Germany

Reiko HOJO\*

## ABSTRACT

In April of 2011, foreign language (English in principle) activities were formally introduced into 5<sup>th</sup> and 6<sup>th</sup> graders of all the public elementary schools in Japan. Since it has been reported that about 38% of both 5<sup>th</sup> and 6<sup>th</sup> graders have come to dislike the English activities, it is crucial to enhance the positive attitudes of 5<sup>th</sup> and 6<sup>th</sup> graders toward these activities, so CLIL (Content Language Integrated Learning) can be expected to play this role of enhancing the students' motivation toward learning English.

In this article, CLIL will be explained including its definition, followed by review of previous research studies on CLIL in Japan. Secondly, the writer stated about elementary and secondary education system in Germany and what she found about how English education is conducted in Berlin and Brandenburg in Germany which she visited in September of 2015 in order to investigate English education including elementary school level. Finally, a part of the English textbook for 6<sup>th</sup> graders used in Berlin is shown.